

【実践報告】

教職実践演習（幼・小）（幼児教育コース対象）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 田 中 崇 教

はじめに

本報告は、平成28年度「教職実践演習（幼・小）（幼児教育コース対象）」（以下、本科目）の概要とその省察を記したものである。初等教育学科幼児教育コースの4年次生を対象に、教職・保育士養成課程の履修全体を通じて身につけるべき資質能力の涵養を様々なテーマ（内容）や形式（方法）で実施し、保育・教育の専門職者として求められる事項（①使命感・責任感・教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児・児童理解、④保育指導力）を補完・向上させることが本科目のねらいにある。

とりわけ今年度は、幼児教育コースの教員によって従来内容からの改善が活発に試みられた。その企図を端的に言えば、受講学生が保育・幼児教育の日常現場（子育て家庭も含む）に触れる機会、そして同時に彼女らが近い将来の自己像（教職・保育職者としての自己）を具体化することに基づく課題認識・探求機会の拡充であった。

1 授業計画

全30回の授業計画は次の通りであった。

時期	テーマ（○内数字は授業回）
9月-10月 （第1-10回）	・オリエンテーション① ・履修カルテの確認、学修のまとめの作成② ・担当グループ内での模擬指導案構想③ ・特別支援保育に関する講演（幼児-低学年児童）④ ・実習の振り返り—今後の展望に関する講話—⑤ ・特別支援保育に関する講演（高学年児童）⑥ ・現任幼稚園教諭・保育士による教職・保育職者論—広島文教教育学会—⑦⑧ ・園生活に関するグループワーク⑨⑩
11月 （第11-18回）	・幼保ボランティア（1）⑪⑫ ・幼保ボランティア（2）⑬⑭ ・幼保ボランティア（3）⑮⑯ ・幼保ボランティア（4）⑰⑱
11月-12月 （第19-23回）	・模擬保育事前指導⑲ ・模擬保育（1）⑳㉑ ・模擬保育（2）㉒㉓
12月-1月 （第24-30回）	・子育て支援に関する演習㉔㉕ ・子育て支援・保育職に関する演習㉖㉗ ・子育て支援・保育職資質向上に関する総括的演習㉘㉙ ・4年間のまとめ㉚

*別日による補講を含む

2 平成28年度の特徴—将来的自己像を意識した構造的補完・向上プログラムの構築—

本科目は、平成25年度に開講され、以降必要に応じて改善の手が加えられてきた。今年度は授業運営計画をたてる際、受講生（幼児教育コース4年次生：54名）がこれまでに受けてきた教育実習や保育実習等での評価・コメントを手がかりに、本科目での補完点と重視すべき方向性の洗い出しを行った。これらは次の2点にまとめられる。

1点目は、幼稚園・保育所・認定こども園（以下、幼稚園・保育所等）での実地調査（経験）の拡充である。平成27年度以前においても、ボランティアといった形で、本学のNPプログラムや保育に関する様々な学外団体プログラムに参加する体験活動が授業内容に位置づけられてはいた。だが、保育所・幼稚園等での活動でなければならないわけでは必ずしもなかった。そのため、受講生の中には教育実習や保育実習で認識した課題を保育所・幼稚園等にて補完することが十分とはいえない状況にあった。教育実習や保育実習における実習協力園からの評価・コメント内容も、その機会設定の必要性を十分に認識させるものであった。

そこで、昨年度からの改善点として、幼稚園・保育所等で受講生がボランティアとして保育補助に従事しながら「子ども理解」や「職員業務理解」、「クラス運営や園運営及び園内外環境等の理解」を実施する「幼保ボランティア」を設定した。担当教員による事前指導を受け、受講生は自ら希望する幼稚園・保育所等に自らアポイントを取り、教育実習・保育実習における課題の補完と同時に教職・保育職を目指す者としての自らの資質を「幼稚園・保育所等」で実践的に向上させるという設定意図を理解した。先述の通り、昨年度までの本科目には設定されておらず、前例がなかったため、ボランティア園の確保に苦心する受講生が散見されたことは確かであった。しかし、幼児教育コース教員による指導・助言体制（共通理解）が確立されていたため、全ての受講生が必要に応じてバックアップを受け、「幼保ボランティア」を適切に実施した。

2点目は、各回の授業内容の構造化である。具体的には、受講生が在学時に卒業後の自己像をより具体的に描くと同時に、その自己像実現に向けて在学時に取り組む（補完する）活動として、各回の授業内容を編成することであった。従来、本科目の内容構成は教育実習・保育実習を含めた教職・保育士養成課程学修の振り返りにどちらかといえば比重が置かれていた。確かに、「学びの軌跡の集大成」としてこれまでの学修の振り返りをすることは重要である。だが、目指すべき将来の自己像を個々で具体的に描いておかなければ、受講生は在学（現）時点での自己と比較することができない。そうなれば、本科目の「履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が（現時点での）課題であるのか」という課題認識に支障を来し、「教職生活をより円滑にスタート」しにくくなるのではないかとの問題が浮かび上がった。

そこで、「実習の振り返り—今後の展望に関する講話—」や「子育て支援に関する演習」を設定し、その後「子育て支援・保育職に関する演習」並びに「子育て支援・保育職資質向上に関する総括的演習」を連続して実施した。まず、「実習の振り返り—今後の展望に関する講話—」では、教育実習を担当した幼児教育コース教員によって、着任後に教職・保育職者として求められる業務内容や、陥りやすい苦悩等のモデルが提示された。また同時に、在学（現）時点で必要とされる心構えや具体的活動の解説がなされた。これらの講話内容には、以降に行われる学外での「幼保ボランティア」や学内外の研修・演習で取り組むべき自己の課題を明確にする意図が組み込まれた。この演習を経験した受講生は、自らの課題を明確にして「幼保ボランティア」に取り組んだのである。

また「子育て支援に関する演習」では、本学地域連携室金子留里室長を講師として招聘し、子育て支援に関する基本的事項について、講話やグループワークを通して受講生は理解を深めた。この演習を引き続く「子育て支援・保育職に関する演習」では、幼児教育コース卒業生かつ教職・保育職の経験者（現任を含む）かつ妊娠・出産後間もない母親にアドバイザーを依頼した。教職・保育職新任時

代や子育ての体験談に基づきながら、受講生と分科会形式にて交流することを演習の趣旨とした。受講生と卒業生アドバイザー、そしてその子どもたちがくつろいで語り合うことのできる空間として、本学心理学科のサイコロボや模擬保育室にて開催した。また当日には、幼児教育コース3年次生有志にも協力を仰ぎ、幼い子どもたちの保育補助体制を敷くことができたことも付記しておく。

この時期までに就職内定を獲得し、4月以降の自己像を現実的に意識しつつある受講生にとって、卒業生アドバイザーはまさにこの上ない「近い将来」モデルである。同時に彼女らは、教職・保育職着任後の受講生にとって子育て支援の対象とみなすこともできる。そのため、子どもを持つ母親の心情を実践的に理解することも受講生は併せて体験できた。すなわち、この交流会は保護者理解の場としても機能しえたのである。

そしてこれら一連の演習の総括を主眼とした受講生による自主研修活動として「子育て支援・保育職資質向上に関する演習」を設定した。従来から本科目に組み込まれていた教育・保育、子育て支援に関する様々な学内・学外団体のプログラムの中から受講生が任意に選択し参加する自主活動である。いうまでもなく、幼稚園・保育所等と場を限定した「幼保ボランティア」とは異なり、個々の学生の課題-探求意識に基づく総括的な実地演習（研修）の機能を目論んだ回である。

3 実施概要と省察（成果と課題）

先述の通り、本科目は今年度において実地調査（経験）の拡充と各回の授業内容の構造化に意識を置き編成された。まず、9月-10月期には教育実習・保育実習をはじめとした教職・保育士養成課程学修の振り返りと補完がテーマであった。受講生は、「教育実習・保育実習（幼教コース教員）」、「特別支援（学外講師）」、「理論・実践(学内外講師)」、「教職・保育職者論（学内外講師）」などといったテーマに基づき、教職・保育職を目指す自らの学びをロールプレイ演習等によって振り返り、課題と今後の取り組みを明確にした。こうした振り返り・課題認識作業を経て、11月期には幼保ボランティアを実施した。さらに、幼保ボランティアで経験した学びを用いて模擬保育を学内にて実施（11月-12月期）し、学びを深めるに至った。そして、12月-1月期には、子育て支援、保護者理解に関する演習を実施するとともに、総括的な演習およびまとめ（今後の教育・保育政策の動向理解を含む）を行った。

以上の実施について、受講生記述による記録用紙・実施報告書類や学内外の講師（卒業生アドバイザーを含む）、幼児教育コース教員らの意見を参考に、成果と課題に関する省察を試みたい。とりわけ、本報告では今年度に新たに取り組んだ点を中心とする。

まず、実地経験の拡充については「受講生が個々に課題意識を持ち、実地活動することができた」点を成果として見出すことができる。受講生は個々で課題意識が異なるからこそ、各々には幼稚園・保育所等の実地で目的を持ったより有意義な活動ができたという。加えて、数ヶ月後には実際に職員として従事するという「迫り感」と教育実習・保育実習では体験できなかった業務補助への従事も、近い将来の自己像構築に寄与したといえる。さらに、幼稚園・保育所等の職員との人間関係の構築や社会性の実践的涵養といった点も成果に位置づけられるだろう。他方で、課題として挙げられる点は、受講生ならびに受け入れ施設における「幼保ボランティア」の目的（趣旨）理解である。4年次後期に実施するため、受け入れていただく幼稚園・保育所等が就職活動と混同してしまう事例がみられた。また開講当初には「幼保ボランティア」の目的を十分に理解しきれていない受講生も散見され、幼児教育コース教員による補足指導が必要であった。次年度以降、受講生のみならず受け入れ施設への配慮は不可欠ということが明らかになったといえる。また、受講生の中には「幼保ボランティア」等といった本科目の実施内容を4年次前期の早い時期に予告すべきとの要望も寄せられた。この指摘は、構造化の項目にて併せて検討する。

各回の授業内容の構造化についても、自己像（課題認識を含む）理解や諸演習内容の意義理解を受講生に見出せた点は成果であろう。受講生による記録用紙・実施報告書に基づけば、「何のために、どのような目的を持って活動するのか」を整理・理解した上で学外にて活動することは、彼女らに対する地域の評価にもよい影響を及ぼしたものと想定される。また、各回の授業内容を構造化することにより課題意識を構築した受講生が学外者と接触することの意義は、翻って学外者にも刺激的な経験であったという。具体的には、卒業生アドバイザーである。今回の企画が、教職・保育職への就職、結婚、出産、子育てといった「自身のこれまでの歩みを振り返り、整理する」機会、あるいは教職・保育職という「同じ道を志す後輩と語り合うことで新たな刺激を得る」機会になったという。これは、課題意識を持つ受講生と語り合う中で、話題に対する理解が深まるがゆえに発生した効果といえる。重ねて言えば、受講生のみならず受講生に関わる側にも生まれるメリットの一例とみなすことができる。

本科目がより効果的な成果を示すためにも、いくつかの課題があげられる。まずは、先述した実施内容の予告である。いわば本科目の授業内容のみならず、教育実習・保育実習と連動する形で構造化を図っていく必要が示されたともいえる。

以上のような今年度の省察（成果と課題の検討）に基づき、次年度以降も教職・保育職を目指す受講生にとって実りある学修になるための改善をさらに進めていきたい。

謝辞

今年度本科目を実施するにあたり、多大なるご支援ご尽力を賜った幼児教育コース卒業生、さらには心理学科、学園統括部地域連携室、そして初等教育学科幼児教育コース3年次生有志に謹んでお礼申し上げます。